

研究ノート

アウグスティヌスにおける悪の問題

松田 禎 二

—

アウグスティヌスがみずから大著と呼ぶ「神国論」において⁽¹⁾、悪の問題がどのように解明されているかを、できる限り原典に即して考察してみよう。「目に見えるすべてのものの内で、最も大いなるは世界であり、目に見えぬすべてのものの内で、最も大いなるは神である。しかるに、世界が存在することを我々は見、神が存在することを我々は信ずる。」とアウグスティヌスは明言する⁽²⁾。そして彼によれば、神はこの目に見える可変的な世界の、目に見えぬ不変的な創始者である⁽³⁾。神が世界の創造者であることは聖書の權威をまつまでもない。世界それ自体がその極めて秩序正しい変化や運動によって、また目に見えるすべてのものの極めて美しい形相によって、それが創造されたものであること、しかも言葉に言い表わしがたく目に見えぬ仕方で偉大であり、且つ美しい神による以外には、世界は創造され得なかったことを無言の内に叫んでいるからである⁽⁴⁾。アウグスティヌスは世界のみごとな秩序を賛嘆し、同時にこのような秩序正しい世界を創造した英知的な神の存在を確信する。彼は、すべてのものが神の知恵 *sapientia Dei* によって造られたと言う⁽⁵⁾。その知恵には、これによって造られた目に見える変化する事物の目に見えぬ不動の理念 *ratio* ⁽⁶⁾ があり、神はこの理念に基づいて世界を無から *de nihilo* 創造したのである⁽⁷⁾。従って、もし神が世界を保持する力を取り去るならば、世界は再び創造以前の無に帰するほかない⁽⁸⁾。ところで神は最高の存在 *summa essentia* であり、即ち最高に存在し従って不変的なゆえ、無から創造したものに存在 *esse* を付与したのであるが、或るものにはより多く、他のものにはより少なくこれを与え、こうして存在するものの本性を段階的に秩序づけた⁽⁹⁾。従って、種々の被造物の間には、整然とした

本性の秩序 *ordo naturae* が認められる。即ち被造物 *creatura* において、生命を持つものはこれを持たぬものに優る。生命あるもの *viventia* においては、感覚を持つものはこれを持たぬものに優る。感覚あるもの *sentientia* においては、知性を持つものはこれを持たぬものに優る。知性あるもの *intellegentia* においては、不死なるものは死すべきものに優る。そこで天使は人間に優るのである。⁽¹⁰⁾

しかしながら、何故に神は世界を創造したのであろうか。神の世界創造の理由は何か。アウグスティヌスによれば、神は何らかの必要のゆえに、もしくは何かの欠乏を充たすために世界を創造したのではなく、ひとえに神の善性 *bonitas Dei* から、即ちそうすることが善であったゆえに、世界を創造したのである。⁽¹¹⁾ そこでアウグスティヌスは言う。「善き神が善きものを造った。神に非ざるものは神に劣るが、しかしなお善きものであって、善き神による以外には生じなかったであろう。」⁽¹²⁾ そして彼によれば、神はそれのみが単純で従って不変的な善であり、この善によって創造されたものはすべて善きものではあるが、しかし単純ではなく可変的な善である。⁽¹³⁾ 即ち、被造物は神によって *ab Deo* 造られたゆえに、確かに善きもの *bona* であるが、また無から *de nihilo* 造られたゆえに可変的なもの *mutabilia* である。⁽¹⁴⁾ そこで、あらゆるものの本性はそれが存在し、従ってそれ自身の節度 *modus* と形相 *species* をもち、一種の内的な調和 *pax* にある限り疑いもなく善である。そして、本性の秩序に従ってあるべき場にあるときには、本性はその受けた存在を保存する。だが永続する存在を得なかった場合には、本性はその必要と欠乏のゆえにより良く又はより悪しく変化する。かくてあらゆるものの本性は、万有を主宰する神の計画の中に含まれている終末へと、神の摂理によって向かうのである。⁽¹⁵⁾ しかし、このような見方——善き神が世界を善く造った——に従うとすれば、いったい悪 *malum* はどのように理解されるのであろうか。すべてのものの本性は、それが善き神によって創造され且つ保持されている限りでは善でなければならず、では悪は果たしてどこに己れの座を占めるのであろうか。アウグスティヌスは答える。「いかなる本性も悪ではなく、善の喪失 *amissio boni* が悪と呼ばれるのである。」⁽¹⁶⁾ また「いかなる本性も決して悪ではない。悪というこの名称は善の欠如 *privatio boni* 以外の何ものでもない。」⁽¹⁷⁾ してみれば、悪はあたかも物の影のごとくに、本性の善に伴う。悪は本性に反し本性を損うものでありながら、しかも本性と共にしか存し得ない。

それゆえ、悪は決して実体的な存在ではなくして、消極的な一現象に過ぎぬと言わなければなるまい。しかし既に知ったように、あらゆるものの本性は神によって造られたゆえに、善なるものではあっても、またそれは無から造られたゆえに可変的なものである。従って本性は、もしこれを存在せしめている神の力がなければ、常に無に帰そうとする消極性を帯びている。けだし、このような根本的な欠乏性ないし不安定性は一切の被造物の荷なう言わば宿命であって、正にそれゆえにこそ欠乏を充たさんとする被造物の絶えざる運動変化が引き起こされるのである。そうしてみれば、悪は被造の本性的な必然的な制約と言わなければならず、万物を統べる神の摂理を信じ、且つ創造の秩序に従って変動する世界を観察する者にとっては、この偉大な芸術家 *Artifex* の手になる世界は全体として美しいのである。⁽¹⁸⁾

しかしながら、以上のごとき悪の捉え方はしよせん形而上学的ないし存在論的な悪の解釈であって、若きアウグスティヌスが善悪二元論の立場に立つマニ教の迷妄から目覚まされた、かの新プラトン主義の哲学に深く影響されたものである。⁽¹⁹⁾しかし、悪の問題が世界における悪から自己における悪へ、眺める悪から苦しむ悪へと転ずるとき、アウグスティヌスはもはや新プラトン主義の哲学に安住することはできなかつた。きびしい霊肉の分裂に悩む彼は自己の内なる悪の解釈を求めて、聖書へことにパウロの教えへとおもむいたのである。⁽²⁰⁾こうしてアウグスティヌスが聖書から、あるいはパウロの教えから学び取った悪の捉え方は、彼の悪の理解をいちだんと深めたのであるが、我々はさらにこの宗教的ないし道徳的な悪の解釈を、彼の著「神国論」のうちに追求してみよう。

二

アウグスティヌスは「神国論」第22巻第22章において、人間の現実の生を満たすさまざまな禍を詳細に書き述べたあと、人間の本性は真実の且つ最高の神によって創造されたゆえに、もし人類の最初の人間において重大な罪が犯されなかったならば、このような悲惨 *miseria* に落ち入ることはなかったであろうと語っている。⁽²¹⁾それでは、人祖の犯した重大な罪とは何であろうか。またそれが人の世のさまざまな悪と、いったいどのような関係があるのであろうか。アウグスティヌスは人類の悲惨な歴史が始まる以前に、言わば天上で演ぜられた悲劇から説き起こす。それはま

ず、人間と共に知性的存在たる天使の犯した罪である。

さて、唯一の眞実なる神は至福にして不変的な善であるが、この神によって無から造られた被造物はすべて可変的な善である。しかし知性的存在である天使や人間は、その自由意志によって不変的な最高善たる神に固着することができ、以て淨福であるような仕方⁽²²⁾で創造されている。それゆえ、神に固着しないことは知性的存在者の本性に反する欠陥ないしは悪徳 *vitium* であって、当然に悲惨を招くのである。⁽²²⁾ アウグスティヌスは、最高に存在し最高に善であり最高に賢明であるところの、神に固着すること *adhaerere Deo* を誉めたたえて言う。「神をめざして生き、神によって賢く、神を喜び、そして死も誤謬も煩悶も無く、かくも偉大な善を享受せんために、神に固着するということが何と大きな功績であるかを、誰がふさわしく考えたり語ったりすることができようか。」⁽²³⁾とて、⁽²⁴⁾ところで、本性の地位において他のすべての被造物を陵駕する天使は、もし欲するならば、その淨福の源なる神を見捨てて直ちに悲惨が結果する、⁽²⁵⁾といった自由意志を与えられていた。⁽²⁶⁾しかるに、天使のうちで或るものはすべてに共通の善たる神自身に、その永遠性と真理と愛とに留まったが、他の或るものはむしろ自己の力を喜び、あたかも自己にとっての善が自己自身であるかのごとく、かのすべてに共通のよりすぐれた至福な善から自己の特殊な善へと墮した⁽²⁷⁾のである。こうして、淨福な善き天使と悲惨な悪しき天使との相違が生じた。言うまでもなく、善き天使の淨福の原因は最高に存在する神に固着していることであり、他方悪しき天使の悲惨の原因は、最高に存在する神から離れて自己自身へと転じたことである。この欠陥ないし悪徳 *vitium* は高慢 *superbia* と呼ばれるものにほかならない。⁽²⁸⁾しかし、これら二種類の天使の相違はその本性や起源に基づくのではなく、⁽²⁹⁾というのはいずれも善き神によって創造されたのであるから、あくまでその意志や欲求に基づくのである。即ち、悪しき天使は自己の悪しき意志によって墮した⁽²⁹⁾のである。それでは、悪しき天使の悪しき意志をひき起したものは何であろうか。そもそも何がその意志を悪にしたのか。アウグスティヌスは悪しき意志 *mala voluntas* の原因について言う。悪しき意志はそれ自体効力 *effectio* ではなくて、⁽³⁰⁾欠落 *defectio* であるから、悪しき意志の効力因 *causa efficiens* はなく、むしろ欠落因 *causa deficiens* があるのみである。即ち、最高に存在する神からより少く存在する自己へと欠落すること、これが悪しき意志をもつことの始まりである。それゆえ、

このような欠落の原因を見い出そうとするのは、あたかも誰かが闇を見ようとしたり、沈黙を聞こうとしたりするのに似ている。⁽³⁰⁾重ねて言えば、意志が本来それ自体として悪なる対象へ向かうというのではなくて、意志が本性の秩序 *ordo naturae* に反して、最高に存在するものからより少なく存在するものへ向かうということ、⁽³¹⁾このような意志の欠落そのものが悪なのである。従って、悪しき意志の効力因は存しない。むしろ悪しき意志こそが、これによって天使の本性の善が損われた悪の起源である。しかし、善き意志の効力因は存する。即ち、それは神であって、神の援助なしには善き天使も善き意志をもつことができなかった。けだし、彼らはその善き意志により最高に存在する神に固着して浄福を得たのであるが、このことは神が天使の本性を無から造って神を享受することのできるようにし、また彼らを刺激して神を欲求するようにしたあと、神自身によってこれを満たしてより善くしたのでなければ、⁽³²⁾確かに不可能だからである。

ともあれ、善き意志と悪しき意志とにより、天使の間に分裂が生じて二つの集団が成立し、そしてアウグスティヌスによれば、この二つの集団に基づいて二つの国、即ち「天の国」と「地の国」あるいは「神の国」と「悪魔の国」の起源がおかれたのであるが、我々はここで意志が極めて重要な役割を演じているのを認めざるを得ない。正しい意志は善い愛であり、邪悪な意志は悪い愛であると主張するアウグスティヌスは、⁽³³⁾また当然に次のごとく言っている。「二つの国は二つの愛によって造られた。地の国は神をないがしろにするまでの自己愛によって、天の国は自己をないがしろにするまでの神への愛によってである。」⁽³⁴⁾我々は次に、人類の最初の人間の犯した罪について考察しなければならない。

三

アウグスティヌスは聖書の信仰に従い、人類は神が最初に造ったかの一人の人間から始まったと⁽³⁵⁾言う。では、何故神は最初にアダムという一人の人間のみを創造したのか、⁽³⁶⁾といえは、それは人間社会の統一と和合の絆が一層固くなるように、人間が本性の類似によってのみならず、人間的感情によっても相互に結ばれるようにである。⁽³⁶⁾このことは神が多数者における統一をよみすることを示す。ところで、神は人間を魂と身体とから成る理性的動物 *animal rationale* として造った。⁽³⁷⁾人間は魂

anima のみでなく、また身体 corpus のみでなく、その両者から成り立っている。魂は人間全体でなくて人間のより優れた部分であり、身体も人間全体でなくて人間のより劣った部分であるが、その両者が結合されて人間 homo の名称を得るのである⁽³⁸⁾。しかし、実際に人間において魂と身体とがどのように結合されているか、その結合の仕方は不可思議で人々の理解を越えている。しかも、これが現実の人間であるとアウグスティヌスはいう⁽³⁹⁾。しかし、このような構造をもつ人間が理性的動物と言われるのは何故か。アウグスティヌスによれば、神は人間を神の似像 imago Dei として造った。即ち神は人間のために、理性ないし知性をそなえた魂を創造し、これを付与されていない被造物のすべてに優るようにしたのである⁽⁴⁰⁾。従って、人間の魂 anima humana は理性的魂 anima rationalis⁽⁴¹⁾ もしくは知性的魂 anima intellectualis⁽⁴²⁾ であって、これはまた心 mens とも呼ばれている⁽⁴³⁾。それゆえ、このような魂をもつ人間はもはや単なる動物とは言えず、理性的動物と言われるのであるが、アウグスティヌスは更にくわしく人間を「理性的な死すべき動物」と定義する。この定義は人間が天使と獣との中間に位することを示す。即ち、獣は非理性的な死すべき動物であり、他方天使は理性的な不死なるものであるゆえ、人間は天使よりも劣るが、獣よりも優れていて、獣と共通して可死性 mortalitas をもち、天使と共通して理性 ratio をもつところから、理性的な死すべき動物と言われるのである⁽⁴⁴⁾。

さて、アウグスティヌスによれば人類の最初の人間、即ち人祖は楽園にあって神の祝福を受け幸福であったが、この幸いな状態は永続しなかった。というのは、人祖は神の戒めを破って罪を犯したからである。しかし、この悪しき行為は悪しき意志が先立って為されたのであり、そして悪しき意志の始まりは高慢 superbia にほかならない。高慢とはよこしまな高ぶりへの欲求であるが、魂が固着すべき神から離れて自己を根元となすことは、即ちよこしまな高ぶりであり、このことは魂が自己よりも満足すべき不変の善たる神から欠落して自己自身に満足するときに起こる⁽⁴⁵⁾。しかし、この欠落は人間の本性が無から造られしゆえに可能であったとは言え、必然的ではなくて随意的であり、当然に正しい罰が結果した。即ち、人祖が罪を犯した結果として、人間の本性は壊敗して死に服し、互いに背反する情念によって攪乱されるようになったのである⁽⁴⁶⁾。アウグスティヌスによれば、人祖はもし罪を犯さなかったならば死を経験しないが、もし罪人となったならば死をもって罰せられ、

その子孫もまた同じく死をもって罰せられる、という仕方で創造されていた。それゆえ、人間の死は罪の罰 *poena peccati* ⁽⁴⁷⁾ である。更に、人祖が神に従順であったときは、彼自身において身体は魂に従順であり、その間には秩序があって何の争いもみられなかった。しかるに、人祖が神の戒めを破って不従順となるや、彼自身において身体は魂に不従順となり、その間の秩序が乱れてさまざまな邪欲が生じてきた。この人間の内部の紛争こそは、神に対する人間の不従順の正当な罰である。人祖の犯した罪、即ち原罪はその子孫たる人類全体にも及ぶ。けだしアウグスティヌスによれば、神は人間を正しく創造したが、人祖はその意志によって壊敗して正当にも断罪され、且つ壊敗し断罪された子孫を得る。というのも、個人が生ける形態はまだ各々に配分されていないにせよ、個人がそれから伝播さるべき種子的本性 *ratio seminalis* が既に人祖に存在する。しかも、この種子的本性は人祖の罪によって壊敗し、死の鎖につながれて正当に断罪されているので、人間は別のあり方で生まれることはできない。こうして、自由意志の悪用のために人類を悲惨の連鎖によって、言わば腐敗した根である壊敗した根源から限りなき死の破滅へと導くところの、禍の系列が始まったのである。この死の破滅からは、神の恩恵による以外には解放され⁽⁴⁸⁾ない。⁽⁴⁹⁾

さて、我々は以上にアウグスティヌスの宗教的ないし道徳的な悪の解釈を追求してきた。そして、人祖の犯した罪によってすべての人間がその罪に連座し、悲惨の渦中にあることを知った。これは聖書に従って原罪 *peccatum originale* と呼ばれるものであるが、アウグスティヌスはこの原罪に注目することによって人間の内なる世界の悪を洞察し、そこからの解放をキリストによる神の恩恵に求めた。そこで我々は更に、神の恩恵による悪の克服を探索すべきであるが、所定の紙数が尽きたのでひとまず筆をおくことにしよう。

註

- (1) *De civitate Dei*, I. Praef. magnum opus et arduum. *ibid.*, XXII. 30. ingens opus. *Retractationes*, II. 43. hoc De civitate Dei grande opus.
- (2) *De civ. Dei*, XI. 4. Visibilibus omnium maximus mundus est, invisibilibus omnium maximus Deus est. Sed mundum esse conspicimus, Deum esse credimus.
- (3) *Ibid.*, X. 18.

- (4) *Ibid.*, XI. 4.
- (5) *Ibid.*, XI. 4. sapientia Dei, per quam facta sunt omnia. この「神の知恵」は「神のみことば」Verbum にほかならない。cf. *ibid.*, XI. 24 Pater genuit Verbum, hoc est sapientiam, per quam facta sunt omnia.
- (6) *Ibid.*, XI. 10.
- (7) *Ibid.*, XII. 16.
- (8) *Ibid.*, XII. 26.
- (9) *Ibid.*, XII. 2. なおアウグスティヌスは esse は essentia に由来するが、この essentia は実際に新しい語であって古いラテンの作家たちは使用せず、現今ギリシャ語の οὐσία の訳語として用いられるに至ったと述べている。
- (10) *Ibid.*, XI. 16.
- (11) *Ibid.*, XI. 24. cf. *ibid.*, XI. 22., XII. 17.
- (12) *Ibid.*, XI. 23. ut Deus bonus conderet bona et essent post Deum quae non essent quod est Deus, bona tamen, quae non faceret nisi bonus Deus.
- (13) *Ibid.*, XI. 10.
- (14) *Ibid.*, XII. 1.
- (15) *Ibid.*, XII. 5.
- (16) *Ibid.*, XI. 9. Mali enim nulla natura est: sed amissio boni mali nomen accepit.
- (17) *Ibid.*, XI. 22. omnino natura nulla sit malum nomenque hoc non sit nisi privationis boni.
- (18) *Ibid.*, XII. 4.
- (19) cf. *Confessiones*, VII. 12.
- (20) cf. *ibid.*, VII. 21.
- (21) *De civ. Dei*, XXII. 24.
- (22) *Ibid.*, XII. 1.
- (23) *Ibid.*, XI. 28.
- (24) *Ibid.*, XII. 1. Quam porro magna sit laus adhaerere Deo, ut ei vivat, inde sapiat, illo gaudeat tantoque bono sine morte sine errore sine molestia perfruat, quis digne cogitare possit aut eloqui? cf. *ibid.*, X. 3.
- (25) *Ibid.*, XI. 15.
- (26) *Ibid.*, XXII. 1.
- (27) *Ibid.*, XII. 1.
- (28) *Ibid.*, XII. 6.
- (29) *Ibid.*, XII. 1. cf. *ibid.*, XI. 33.

- (30) *Ibid.*, XII. 7.
- (31) *Ibid.*, XII. 8. cf. *ibid.*, XII. 6.
- (32) *Ibid.*, XII. 9.
- (33) *Ibid.*, XIV. 7.
- (34) *Ibid.*, XIV. 28. Fecerunt itaque civitates duas amores duo, terrenam scilicet amor sui usque ad contemptum Dei, caelestem vero amor Dei usque ad contemptum sui.
- (35) *Ibid.*, XII. 9. cf. *ibid.*, XII. 22.
- (36) *Ibid.*, XII. 22. cf. *ibid.*, XIV. 1.
- (37) *Ibid.*, V. 11. animal rationale については, *ibid.*, XXII. 24. in homine, quod est animal rationale. IV. 13. animalia rationalia, sicut sunt homines.
- (38) *Ibid.*, XIII. 24. cf. *ibid.*, XIV. 4.
- (39) *Ibid.*, XXI. 10.
- (40) *Ibid.*, XII. 24. imago Dei については, cf. *ibid.*, XI. 2; XI. 26; XII. 28; XIII. 24; XIX. 15.
- (41) *Ibid.*, XIII. 24.
- (42) *Ibid.*, X. 3. cf. *ibid.*, IX. 2. anima humana, id est rationalis et intellectualis.
- (43) *Ibid.*, X. 29. mens については, cf. *ibid.*, IX. 5; XI. 2.
- (44) *Ibid.*, IX. 13. cf. *ibid.*, XVI. 8. homo, id est animal rationale mortale.
- (45) *Ibid.*, XIV. 13.
- (46) *Ibid.*, XIV. 12. cf. *ibid.*, XIII. 3.
- (47) *Ibid.*, XIII. 3. cf. *ibid.*, XIII. 4.
- (48) *Ibid.*, XIII. 15.
- (49) *Ibid.*, XIII. 14.